

## コミュニカティブな英語教育における発問力

### The Power of Asking Questions in Getting L2 Classrooms Activated

田中茂範

Shigenori TANAKA

慶應義塾大学

*Keio University*

#### Abstract

This article focuses on the power of asking questions in L2 classroom situations. We do not use interrogative forms simply because we want to have the answers. The forms are used not only for the information-gathering function, but also for the interpersonal and meaning-creating functions. Classroom activities are guided and activated by the interplay of asking questions and answering them between the participants. This article suggests that there are three conditions to satisfy in order for the interplay to become pedagogically sound: (1) authenticity, (2) meaningfulness, and (3) personalization. We then describe the forms of asking questions and responding to them. Not all questions are answerable; some are easy to answer and some are, otherwise. For learners to be able to handle challenging questions, we suggest that we need to teach them a set of “responding strategies” in the early stages of language learning.

#### Keywords

the Power of Asking Questions, Classroom Activation, Conditions for the Act of Asking Questions, Responding Strategies

#### 1. はじめに

授業には内容消化型と活動型の2つが考えられる。教師が内容(WHAT)を提示し、それを生徒が消化(learn)するというのが内容消化型だが、これはこれとして教育を構成する不可欠な部分である。しかし、英語教育では「英語を使う」という言語運用力の育成が目標となることから、learning by doingの視点は不可欠であり、doingを実践するための活動の比率を高めていかなければならない。ここでいう「活動」には「プロジェクト(project)」や「タスク(task)」が含まれるが、「遣り取り(interaction)」も主要な活動である。

教室内では、当然のこととして、教師と生徒の遣り取り、生徒同士の遣り取りが中心となる。本稿での狙いは、教室内遣り取りにおける「発問(asking questions)」という行為の意義を再考することにある(教室内での発問に関する教育学的研究は古くからあるが、代表的なものはStevens(1912)とSanders(1966)であり、最近ではMorgan and Saxton(1991)がある)。まず、発問の機能についてふれ、次に教育的に有効な発問の条件について言及し、

それに引き続き、発問タイプとその応答の仕方についてみていきたい。

## 2. 質問の機能

何かに疑問を抱き、質問文を形成し、それを発問する。英語でいうなら、**having a question about something**(疑問を持つ)、**making a question**(質問文を作る)、そして**asking a question**(発問する)である。これは、人々の生の営みにおいて日常的な言語行為である。根源的には、何かを知りたいという無意識の欲動がそうした言語行為と結びついている。幼児は質問を投げかけることで世界について学び、哲学者は発問という行為を通して常識を問い、思惟する。してみると、発問という行為は、教育というものの根底を成すものであると同時に、発問する力の養成はその目的でもある。Morgan and Saxton(1991)は、教室内での教師による発問の意義を以下のように整理している。

- the act of asking questions helps teachers keep students actively involved in lessons;
- while answering questions, students have the opportunity to openly express their ideas and thoughts;
- questioning students enables other students to hear different explanations of the material by their peers;
- asking questions helps teachers to pace their lessons and moderate student behavior; and
- questioning students helps teachers to evaluate student learning and revise their lessons as necessary.

ここで示されている発問の意義は、英語教育においても妥当する。しかしながら、英語教育においては、当然のこととして、発問という言葉行為のコミュニケーション(社会的相互作用)における機能について考えておかなければならない。

発問はコミュニケーションの遂行において決定的な要素である。なぜなら、双方のなんらかの「情報のズレ(information gap)」がある場合に、コミュニケーションが要請されるからである。興味・関心の違い、文化の違い、誤解、知識量の違い、他者情報の不足などすべて「情報のズレ」である。

情報のズレを埋めるため求められるのが質問を発するという行為である。しかし、英語教育における発問の役割・意義を考えるには、ここでいう広義の「情報のズレ」という概念を「発問の機能」として整理しておく必要がある。というのは、発問という行為は、欠けた情報を補充するためだけに行われるのではないからである。発問行為の働きを大別すれば、以下の3つの機能にわけることができよう。

- (1) 対人関係機能(interpersonal function)：対人関係の形成、維持、調整における質問行為の働き
- (2) 情報収集機能(information-gathering function)：世界の出来事、物事について

ての情報を得るための質問行為の働き

- (3) 意味生成機能(meaning-creating function) : 新しい意味やアイデアを生み出すための質問の力

これらの機能は排他的ではなく相互に関連し合っているが、あえて個別機能に焦点を当てるとすると、上記の3つの機能に集約されるように思われる。発問の対人関係機能は、まさに対人関係に関わるものであり、挨拶(How're you doing? など)、他者配慮(Are you OK? など)、意図の確認(What do you mean by that? など)、依頼(Could you give me a hand? など)、提案(How about a cup of tea? など)、驚きの表出(What? など)のように多種多様なかたちで使われる。基本的には他者との相互行為に関わる発問であり、いわゆる「社会的力」が端的に現れている。これは、情報のズレという観点からいえば、他者情報のズレを埋める働きであるといえるだろう。

会話においては、何かを言うということだけでなく、何かを言うことによって何をしてほしいのか、あるいは何をしたいのかといった話し手の行為意図が重要になる。例えば、Your dress looks gorgeous. という表現は、内容としては「君のドレスはすばらしい!」ということだが、こう発話することで「相手を褒める」「相手を誘いたい」「自分の服装も褒めてもらいたい」など、なんらかの思いが込められて使用される。There is a bull in the street. という発言でも、単なる報告なのか、警告なのか、怒りの表現なのか状況によって話し手の意味は変わる。行為意図を表現するための慣用化された表現がたくさんあり——それらを機能表現と呼ぶが——その多くは、疑問文の形を採る。以下はその例である。

#### 依頼する

1. Can you open the window, please? 窓を開けてもらえますか?
2. Do you mind taking me to the station? 駅に連れて行ってくれないかな?

#### 提案する

1. How about going swimming? 泳ぎに行くのはどう?
2. Why don't you phone him personally? 自分で彼に電話をしたらどうですか?

#### 勧める・申し出る

1. Can I help you with that? それ、手伝いましょうか?
2. Would you like me to take you to the library? 図書館まであなたをお連れしましょうか?

#### 許可を求める

1. Would you mind if I borrowed your CD? CDを借りてもいいですか?
2. Would it be all right for me to leave 20 minutes early today? 今日、20分ばかり早く帰ってもかまわないでしょうか?

#### 念を押す・気づかせる

1. Can I remind you about the meeting at 2 p.m.? 2時の会議、覚えていますよね。
2. Will you try to remember to call him tonight? 今夜、彼に電話するのを覚えていてくださいね。

### 詳細を求める

1. Can you explain that in detail? もっと詳しく話していただけますか？
2. Would you be more specific? 具体的にはどういうことになるでしょうか？

一目でわかるように、これらの表現の多くには、can / will / would / could などの態度表明型の助動詞が含まれているが、ほとんどが定型化された表現である。これは質問文の体裁をとっているが、機能的には、いわゆる yes/no の答えを求める質問というより、「何かをしたい、何かをしてほしい」という主旨の行為意図を表現するものである。疑問文による行為意図の表出は「対人関係機能」と見なすことができる。

「情報収集機能 (information-gathering function)」は、まさに、発問の典型的機能であるが、yes/no の答えを期待するもの、A or B で選択を要請するもの、さらに 5W1H (who, what, when, where, why, how) についての情報を求めるものがある。仮に事件があれば、これらの一連の質問が行われ情報収集が行われるだろう。また、歴史、地理、数学、物理など教科内容の学習においても、生徒の側からいえば、意識的か無意識的かを問わず、yes/no, A or B, あるいは 5W1H の質問を通して知識の構成が行われるだろうし、教師の側からいえば、発問行為を通して学習活動の流れを作り出していく。

3つ目の「意味生成機能 (meaning-creating function)」とは、発問が新たな視点を提供し、それによって新たな物事の見方が生まれるというものである。常識を問うという哲学者の思惟はまさにこれに当たる。発問には、われわれの思考を広げ、深めるという創造的な働きがあるのである。ある話題について論文を書こうとする際に、自分のリサーチ・クエスチョンを見つけられるかどうかが決定的に重要だが、これも質問という形式を整えることで、何をしたいかが定まり、それが研究の動因になるということである。発問の意味生成機能は教育・学問のエッセンスであるが、英語教育においても知的な活動の動因になる。

### 3. 英語教育実践における質問の意義

以上、言語的な分類でいう「疑問文」にはさまざまな働きがある。しかし、英語教育の実践現場では、疑問文はどのように取り扱われているであろうか。まず、疑問文の作り方と答え方という形式面に注目し、言語的操作の仕方を指導する。そして、多くの局面で、教師は、練習の意味で生徒に英語で質問をし、それに対して生徒が答えるという遣り取りが観察される。英語教育における疑問文の取り扱いということについては、言語面と実践面の両面から考察する必要がある。ここでは、実践面に注目したい。一言でいえば、教師は先に述べたような発問の力を十分認識し、白けない遣り取りの場を創出するよう発問を行う必要があるということである。

上述の通り、中学校などの英語教育の現場では「疑問文」を取り上げる際に、その作り方と答え方に関心が置かれる。そして、定着を図るために質問が生徒に向けられる。例えば、以下の「質問－応答」の遣り取りを見てみよう。

(1) Are you a student? --- Yes, I am. I'm a student.

No, I'm not. I'm not a student.

(2) Do you like playing soccer? --- No, I don't. I don't like playing soccer.

Yes, I do. I like playing soccer.

(3) What did you eat for today's breakfast? --- I ate broiled salmon, miso soup and a bowl of rice.

ここでの質疑応答の形式に本来的な問題があるわけではない。重要なことは、質問を投げかける際に、その質問の「善し悪し」を判断する基準をプロの教師として有しているかどうかである。教師の発問はどうあるべきか。教師は何のために発問という言葉行為を行うのか。こうした問いを発することは、教師の自らの教育行為を意識することになり、何のために教室内である活動をしているのかを自覚することに繋がる。生徒との遣り取りにおいて発問を行う際に、考慮すべき条件(基準)として以下の3つを挙げることができると筆者は考える。

(1) 自然であること : **authenticity**

(2) 有意味であること : **meaningfulness**

(3) 自分のこととして捉えることができること : **personalization**

まず、教師の発問は自然であることが求められる。自然であることの裏返しとして「不自然」がある。自然であることは本物であることであり、そのことを **authenticity** という英語で表現している。不自然なやりとりは「白け」の原因であり、白ける場では本来的なコミュニケーションは起こりえない。したがって、英語表現と英語活動が **authentic** であることが、教師が発問を行う際には重要である。

**authenticity** は本物志向性と結びつく。しかし、**authentic** な表現と活動であればよいというものでもない。そこで有意味であること(**meaningfulness**)という条件が必要となる。ここでいう **meaningful** には **comprehensible**(理解可能である)ということと **interesting**(興味を引く)の2つが含まれる。認知的に **meaningful** であると同時に、情緒・感情的に **meaningful** でなければならない、ということである。いくら **authentic** でも **meaningful** でなければ教育(学習)効果は期待できない。換言するなら、**meaningfulness** は **authenticity** の条件であり、その制約として機能する。

**authentic** で **meaningful** であることが遣り取りの基本条件である。それはまた、生徒をやる気にさせ、持続的な動機づけを保たせる要因でもある。がしかし、それだけでは十全とはいえず、生徒自身との関わりが希薄でない活動であることが求められる。すなわち、「自分のこととしてとらえることができる」という個人化(**personalization**)が充足すべき要件となるのである。ここでいう「個人化」とはコンテキスト化のことであり、自分とのレリバンス(**relevance**)の高いコンテキストが生徒にとってリアリティを与えるのである。

繰り返しになるが、質問は教室を社会的相互作用の場にする上で決定的に重要である。しかし、発問を行う際の条件として、**authentic** で、**meaningful** で、そして **personal** であることが考慮されなければならない、というのがここでの論点である。

さて、上で3つの質疑応答の例を挙げたが、(1)の **Are you a student?** が教師から生徒に向けて発せられた場合、**authenticity**, **meaningfulness**, **personalization** の3条件

のいずれも充足せず、形式面のみを機械的に示した例となる。(2)は、質問された生徒がサッカーを好きかどうかの情報が欠けている場合にはここでの条件を満たす可能性があるが、実際に充足するかどうかはそれがどういうコンテキストで発せられるかによる。好きなスポーツが話題となり一連の質問を教師が行っているというコンテキストでは条件は充足されるが、そうしたコンテキストから切り離された形で発せられた場合は、条件の充足には繋がらない。(3)は生徒の数だけ応答の変化が予想され、比較的容易にここでの3条件を満たす発問だが、応答したいことが英語で表現できないという場合、遣り取りが成立しない可能性が出てくる。

#### 4. 質問文のタイプと応答の仕方

多様な質問形式が考えられるが、それに応答する生徒からすれば、答えやすいものと答えにくいもの、答えたくないものなど、応答の仕方に強弱・濃淡が考えられよう。多様な応答の仕方が言語的に示されなければ、そこには本物の有意味な個人的な遣り取りは期待することはできないだろう。言いたいことと英語で言えることとのズレを埋めるために使用されるのが **communication strategies** である。以下では言語面について言及するが、疑問文を取り扱う際に、**communication strategies** を自覚した指導を行う必要があるというのが論点である。

何かの情報を求めるには、疑問文を用いる。期待する答えによって **yes/no** あるいは **5W1H** についての情報の提供を求める場合がある。それぞれ **yes/no** クエスチョンズ、**WH** クエスチョンズと呼ばれる。疑問文の形であるものの、相手からの答えを要求せず、感情的な表現を行う修辭疑問文というものもある。例えば **Do I look a fool?** は形式的には質問だが、意味的には「オレをなめるなよ」といった内容を含意する修辭疑問文である。ここでの論点は、教師が **authentic** で **meaningful** で **personal** な発問をする際に、生徒はいろいろな質問に対する標準的な応答の仕方だけでなく、応答の幅を広げるための応答方略 (**responding strategies**) を身につける必要があるということである。ここでいう **responding strategies** は上記の **communication strategies** の一種と見なすことができる。

##### 4.1 yes/no 疑問文

**yes** か **no** かを問う問いが質問の基本である。教師は、**yes/no** クエスチョンズ の問いの作り方だけでなく、それらに対する応答の仕方を教師は指導するだろう。多くの場合、**yes/no** クエスチョンズであれば、**yes** か **no** で答えるというのが基本とみなされる。以下はその例である。

- (1) A: Is Taro happy?  
B: Yes, he is. / No, he isn't.
- (2) A: Do you know my mail address?  
B: Yes, I do.
- (3) A: Did I hurt your feelings?  
B: No, you didn't.

しかし、Is Taro happy? という質問に対して yes なら Yes, he is., no なら No, he is not. と応答する仕方しか知らないとすれば、そこには自然な遣り取りが発生しないという可能性がある。また、Did I hurt your feelings? に対して No, you didn't. という応答は文法的に間違いではないが、相手の気持ちを配慮するなら、No. That's OK. などと応答したところである。ここで必要なのは、responding strategies(応答方略)である。というのは、第三者の状況を問う発問には推測は不可欠であり、「太郎は幸せか」という発問に対して、応答することはそんなに単純ではない。「太郎は幸せだと思う」「残念ながら幸せではない」「たぶんね」「それは疑わしいね」などいくらでも対応のしかたがあるからである。以下のような表現を使って、こうした思いを表現できることが、上記の authentic/meaningful/personal であることの条件を満たすことにつながるのである。

Yeah, I guess Taro is happy. (うん、幸せだと思うよ)  
Well, I don't think Taro is happy. (幸せだとは思わない)  
Well, I'm afraid Taro is not happy. (残念ながら、幸せじゃない)  
I guess so. (たぶんね)  
I doubt it. (それは疑わしいね)  
I'm not sure. (よくわからない)  
Don't ask me. (聞かないで)

一般に、yes/no を求める質問に対して、yes であることもあれば、no であることもある。また、どちらともいえない場合もあるだろう。仮に yes だとしても、強弱・濃淡のバリエーションを表現したいというのが学習者の心理である。そういった気持ちを表現するための以下のような表現を生徒のレパトリーに含めることが生の遣り取りには求められる。

#### yes のバリエーション

That's great. (それはいい) / Of course. (もちろん) / Yeah. (そうだね) / Sure. (いいねえ) / You better believe it. (実はそうなんだよ) / Uh-huh. (そう) / OK. (いいよ) / You bet. (もちろんさ、そうだと) / I think so. (まあそうだね)

#### no のバリエーション

Uh-uh. (いや) / Can't do it. (無理だよ) / Probably not. (たぶんちがうよ) / Impossible. (ありえない) / By no means. (絶対ない) / No way. (だめ)

#### yes とも no とも言えない場合

Yes and no. (状況によりイエスでもありノーでもある) / Sort of. (まあそんな感じかな) / More or less. (まあね) / In a sense. (ある意味ではね) / It [all] depends. (場合によりけりだね) / It's up to you. (あなた次第です) / Let me think about it. (ちょっと考えさせて)

これらはすべて定型的なチャンクとして単語を覚える感覚で覚えることができる。こうした表現を使うことで、例えば、以下のような会話が教室内で可能になるはずである。

A: Takeshi, are you going camping this weekend?

B: It all depends.

A: It all depends on what?

B: It all depends on who's coming, where the site is and what time we're coming back.

ここで Are you going camping this weekend? に対して, yes か no かのいずれかで応答するしか手段を持ち得なければ, 会話の「展開」の弾みになりにくいのは明らかである。It all depends. と応じることで, 相手に It all depends on what? というリアクションを呼び起こし, それに対して何とか応えようとするところにコミュニケーションは発生するのである。

## 4.2 WH 疑問文

yes/no タイプの疑問文だけでなく, 以下のような WH 語で始まる WH クエスチョンズというものもある。

WH 語 : what, who, when, where, whose, why, how, how many, how long ... .

以下はいわゆる 5W1H に関する質問例である。

Who is the right person for this task? (この課題には誰がぴったりな人だろうか?)

What do you want to eat for supper? (夕食は何を食べたい?)

When did you sleep last night? (昨夜は何時に寝たの?)

Where's the trash can? (ゴミ箱はどこですか?)

Why did you call me last night? (なんで昨夜, 電話してきたの?)

How did you do that? (どうやってそれをしたの?)

いわゆる 5W1H の疑問文で聞かれた場合, who と what それに when と where に関する質問は事実を問うものであるため比較的答えやすい。一方, how と why は答え方に多様性があるため難しい場合がよくある。これは日本語の会話でも同じことである。

(1) A: Who did it?

B: John.

(2) A: When were you born?

B: In 1995. I was born in 1995. I'm thirteen years old.

(3) A: Why do you want to go to India?

B: Because I like the place. I heard a lot about India. I'm interested in their way of life.

(4) A: How can we save the lake?

B: That's a difficult question. I don't know the answer. But I think there is something we can do.

Chuska (1995)は、教室での設問が難しすぎるとか、曖昧で答えにくいものであれば、生徒は積極的に参加することに躊躇いを覚え、学習を損なう可能性があることに言及している。そこで必要なのが応答方略である。特に第二言語学習者の場合には、言語的にも応答に窮することが予想されるが、そうした言語的な不足感を補うためにも応答の方略は必要である。例えば、When did you come to Japan? (日本に何時来たの?)と聞かれて、「3年前」だとすれば Three years ago. と答えればよい。How do you make an origami? (折り紙はどうやって作るの?)と聞かれた場合、これは答えるのがむずかしい。そこで、以下のように応答するのも1つの方法である。

It's hard to explain. (説明するの、むずかしいな)

OK. Look. Like this. You see? (うん、みてて。こんな感じ。わかった?)

一般に応答することのむずかしい WH 疑問文の発問に対しては、以下のような表現を駆使して対応する方法(応答方略)を実践できるようにしておけば、生徒自身が会話の流れの調整(conversational management)を行うことができるようになるはずである。

I don't understand your question. (質問が理解できません)

Could you be more specific? (具体的に言えばどういふことでしょうか)

I don't know how to answer it. (どう答えてよいかわかりません)

Sorry, I don't like to answer it. (ごめんなさい。答えたくありません)

Let me think about it. (考えさせてください)

I don't have the answer. (答えを持ち合わせていない)

I don't know. (さあね)

That's a good question. I'll think about it. (いい質問ですね。考えてみます)

ここでの論点は、responding strategies としてこれらの表現を英語学習の初期の段階で導入しておくことが、教室での教師の発問が生徒との遣り取りをより活性化させるうえで、重要な要素となるということである。

質問の仕方と応答の仕方を形式として学ぶことは基本を成すが、その上で必要となるのが状況に応じた判断を行い、言語的に振舞うという力である。例えば、以下のように形は疑問文でも、直接的な答えを期待しない「修辞疑問文」と呼ばれるものがある。

Who do you think you're talking to? (誰と話していると思っているんだ!)

Who do you think I am? (俺様を誰だと思っているんだ!)

Are you kidding? (冗談でしょう!)

So what? (だから何なんだ!)

Any complaints? (何か文句ある?!)

しかし、修辞疑問文であるか、疑問文であるかは状況に依存する場合が多く、相手にどう

対応するかは状況的判断に拠る。Who do you think I am? と意気込む相手に、You're Mr. Tanaka. と応答すれば関係悪化は避けられないかも知れないが、その選択も状況的な判断による。また、Why is she going out with that guy? (彼女、なんであんな奴と付き合っているんだ！ / 彼女があんな男と付き合っている理由は何だ?) のように理由を聞きたいのか、信じられないという気持ちの表明をしたいのか判然としない場合もあるが、それにどう応じるかはやはり状況判断である。状況判断に基づく応答をするためには、応答のための表現のレパートリーを豊かにしておく必要がある。

## 5. 「コミュニケーション英語」における発問力

新学習指導要領に沿った形で「コミュニケーション英語 I」の検定教科書が様々な出版社において作成中であるが、筆者は、「英語 I」から「コミュニケーション英語 I」へのシフトの鍵となるのは“read and react”であると確信している。テキストを読む、そこから何らかのリアクションを行うということであるが、「コミュニケーション英語」では“and react”の部分をどこまで実践できるかが鍵である。ここで react の理論的考察が必要となるが、筆者は、突き詰めれば(1)reporting, (2)summarizing (paraphrasing), (3)commenting の3つだと考えている。事実(fact)と意見(opinion)ということからいえば、reporting(報道)は基本的に“fact statement”とリンクし、commenting(コメントを述べる)は“opinion statement”とリンクする。ここでいう「事実」とはテキスト内に書かれたことを登場人物、時系列、因果関係などの観点から再構成することであり、態度としては「報道」的な「直接・間接」話法の語り口を採る。summarizing は、個人がテキストをどう読んだかという個々人の読み方を反映した語りであり、個人の観点というものが関係してくるが、テキストに内容的基盤を置くという意味において fact と opinion の中間(融合)と特徴づけることができる。commenting はテキストについてどう感じたかを表現する行為であり、主観的な語りである。

筆者は、生徒にテキストと対話させる上で上記の reacting は不可欠だと考える。そして、reporting, summarizing, commenting を行うための下準備として発問を投げかけることは、「英語で授業をする」上で有効な方法であると考え。reporting のための設問は、当然、テキストについて yes/no, A or B, 5W1H の質問の形で行われ、それに対する回答がテキストを再構成するための素材を提供する。summarizing のための設問もある。何が主題であるか、重要な箇所はどこか、どういう意味構造になっているかなどに照準を当て発問することで、生徒は summarizing の仕方を学ぶだけでなく、summarizing を実践するための素材を得ることになる。同様に commenting を促し、支援するための発問もあるだろう。印象に残ったことは何か、見解に賛成か反対か、自分が主人公の立場だったらどうするか等々、個々の発問を投げかけることで、生徒が commenting というまとまった言語行為を行う流れを作り出すことができる。

## 6. おわりに

英語で授業を展開する際には、教師の発問力が鍵となる。発問とは質問を発する行為であるが、その機能には、対人関係機能、情報収集機能、意味生成機能が含まれ、他者を気遣う発問、知的に刺激的な発問、他者情報を得るための発問などを心がけなければな

らない。さらに言えば、活動型の授業を発問という行為を軸に展開する際に、authentic/meaningful/personal な遣り取りを生み出すような授業計画(行動スクリプト)を立て、それに沿った場面を作り出すことが教師にとっての挑戦となる。多種多様な発問に対して応答の仕方も多種多様である。その際に、応答方略(responding strategies)を生徒が身に付けておくことは、上記のような活動においての必要条件であると同時に、英語を実践的に使う場面においても肝要である。

コミュニケーションという観点からいえば、生徒自身が質問を作り、それを発問するという行為を促すことは重要である。問題解決、意思決定などの局面においては、「何であるか(What is it?)」「何ができるか(What can we do about it?)」「何をすべきか(What should we do about it?)」の3つの問いを巡るさまざまな問いが立てられる。換言すれば、発問力を磨くことは、教師にとっても生徒にとっても大きな報酬(reward)をもたらす。

#### 参考文献

- Chuska, K. (1995). *Improving classroom questions: A teacher's guide to increasing student motivation, participation, and higher level thinking*. Bloomington, IN: Phi Delta Kappa Educational Foundation.
- Morgan, N., & Saxton, J. (1991). *Teaching, questioning, and learning*. New York: Routledge.
- Sanders, N. M. (1966). *Classroom questions: What kinds?* New York: Harper & Row.
- Stevens, R. (1912). *The question as a means of efficiency in instruction: A critical study of classroom practice*. New York: Teachers College, Columbia University.